

林 正儀

Masanori Hayashi

が選ぶ
スピーカー・オブ・ザ・イヤー

2017-2018

オーディエンス 1+1 V2+

デスクトップやニアフィールドでの箱庭的な精密感ほゾクゾクするほどの快感がある

世界に数ある高音質スピーカーの中でも、私はこのコンパクトハイエンドいってよい、オーディエンスを選ぶ。「1+1 V2+」スピーカーシステム、28万5,000円である。V2というのは最新バージョンで、以前別のディストリビューターが扱っていたころ、オーディオショーなどでほればれする美音を聴いたものだ。今回、堀内昭夫氏(元AKアソシエイツ)が立ち上げた「オーディエンスジャパン」扱いとなり、サンディエゴの本社とのパイプも太くなった。というのも、ジョン・マクドナルド社長とは旧知の中で、ぜひ君にやって欲しいと熱烈オファーがあったそうだ。

オーディエンス社(1977年設立)といえば、世界一の小型フルレンジユニット=A3ドライバー(開発に9年)が有名で、妥協のない音楽再生を追求する先進メーカーだ。大型アンプメーカーが開発用リファレンスに採用したほどのパフォーマンスだが、1+1 V2+はその流れを汲む、新しいA3S2-16ドライバーを搭載している。強力な磁気回路と僅か2.5グラムのチタニウム合金コーン、高価なAu24SXワイヤーなどにより超ハイスピード、ロングストロークかつ無類の低歪みを実現。

いやあ、そんな理屈よりも鳥肌ものの音をまず聴くべきだが、見てのとおり宝石のようなエクロージャーにおさめられたパイポール構造がユ

ニークだ。前と後ろに3インチのフルレンジドライバー、両側面の4インチパッシブラジエーターによって増強されるという仕組みである。片方はバスレフポートのように見えるのだが……。

「このモデルは音場を拡大し、低域を拡張し、許容入力パワーを増加させた」と資料にあるとおり、サウンドは実に透明かつダイナミックでスケールが大きく、生音のようにすばらしくナチュラル。そんな音がこのサイズから出るのかと思われるかもしれないが、事実は事実。目をつぶれば、部屋の壁や天井を取り払った

オープンな気分になれるはずだ。クロスオーバーなしの“過激なほど”シンプルなワンウェイ設計の世界観がそこにある。

大型マルチウェイを聴き慣れた耳には、まさに鮮烈なオーディエンスサウンド。デスクトップやニアフィールドでの箱庭的な精密感ほゾクゾクするほどの快感だが、私はたつぷりと空間を与えてアメリカ録音のジャズや、好きなステイシー・ケント、オペラにロックなど聴きたい。最近入ったばかりのファーストワットSIT-1アンプで、じっくり音楽に浸りたいものだ。



●型式：フルレンジ ●ユニット：7.6cmフルレンジ×2、パッシブラジエーター×2 ●推奨アンプ出力：50W以下 ●インピーダンス：8Ω ●再生周波数：22Hz~43kHz ●出力音圧レベル：87dB ●外形寸法：150W×200H×250Dmm ●重量：3.2kg ●価格：¥285,000(ペア)